

タイトル	大友亀太郎研究への視点 ― 研究史の振り返りと今後の研究課題 ―
著者	松浦，努；MATSUURA, Tsutomu
引用	開発論集(116)：189-215
発行日	2025-09-30

大友亀太郎研究への視点

—— 研究史の振り返りと今後の研究課題 ——

松 浦 努*

目 次

はじめに

1 大友亀太郎研究史の振り返り

(1) 各種雑誌への投稿論稿に見る大友亀太郎研究

(2) 単行本研究書に見る大友亀太郎研究

(3) 市町村自治体史に見る大友亀太郎研究

2 今後の研究課題

おわりに

はじめに

「大友亀太郎」¹という名前を聞いて、現在、北海道民の何人が、また札幌市民の何人がその名前を知っているだろうか。²札幌市民であればほぼ知っているように、札幌市の住所表記の東西の基点は「創成川」となっており、それに対して南北の基点は「大通公園」となっている。実は、この「創成川」と呼ばれている札幌市民にはなじみの川の前身となる「大友堀」と呼ばれる用水路を開削した土木技術者が、本稿の考察対象としての大友亀太郎なのである。

その自伝によれば、大友亀太郎とは、次のような生い立ちを有する人物である。

大友亀太郎は、天保5年(1834)4月27日、小田原城から一里半ほど離れた相模国足柄

* (まつうら つとむ) 北海学園大学開発研究所客員研究員

¹ 大友亀太郎の正式な呼称については、亀太郎が西大友という地名の出身であることから、「おおども かめたろう」と呼称するのが正しい、とする説もある。本件については、後述する。

² かくいう筆者も、実は、大友亀太郎の名を知ったのはつい最近のことである。創成川^{そうせいがわ}の存在は知っていたが、その前身となる「大友堀」という用水路を開削した人物が大友亀太郎であることは知らなかったのである。亀太郎のことを筆者に御教示頂いたのは、七飯町在住の小田切清志氏である。拙著〔2024〕出版の際、その第4章執筆に当たり、七飯町での研究調査に協力して頂いた方である。2024年11月10日、同氏との電話のやりとりの中で、小田切氏は次のように述べている。「大友亀太郎が札幌の創成川の源流に当たる「大友堀」を開削した。また、亀太郎は、道南の木古内町「鶴岡」、七飯町「鶴野」の開拓にも従事した人物である。大友亀太郎は、二宮尊徳の弟子である。」この中で同氏が、「亀太郎は、道南の木古内町「鶴岡」……の開拓にも従事した人物である」と述べていることについては、「2 今後の研究展望」の個所で再述する。

小田切氏は、同町で畑作・稲作・花卉栽培等を手広く営農する農園の代表取締役であり、七飯町森林組合代表理事組合長としても活躍する篤農家である。実名表記については、本人からの承諾済み。

下郡上府中村西大友（今の神奈川県小田原市西大友）に生まれた。父飯倉吉右衛門は百姓であり、その農家の長男としてであった。姓は大友、通称亀太郎、名は玄英。幼年にして実業に志を専にし、15、6歳にして家計經理の策を父吉右衛門に計る事数々なり。父も亦其の言に於て容れざる所なし（小野洋一郎編著〔1986〕21頁）。

上述の如く、大友亀太郎という人物は、現在の北海道民にとっても、札幌市民にとっても決してなじみ深い人物ではない。しかしながら、この後に確認されるように、大友亀太郎は、幕末の蝦夷地（後の北海道）開拓と当時の札幌の礎を築く上で、少なくない功績を残している。こうしたことを踏まえ、本稿においては、大友亀太郎が当時果たした事蹟を顕彰すると共に、大友亀太郎に関するこれまでの研究史を振り返ることで、大友亀太郎研究の今後の課題を明らかにしたい。

本稿の目的を果たすために、筆者は、まず各種雑誌へ投稿された大友亀太郎に関する論考に対する分析・考察を加えることとしたい。第二に、単行本として出版された大友亀太郎に関する研究書の分析・考察を、最後に大友亀太郎が北海道開拓に際して関わった地域の自治体史の叙述へも考察の眼を向けることとしたい。

ここで、亀太郎関連論稿並びに研究書、自治体史に対する筆者による分析視角について表明しておきたい。大友亀太郎に関する研究は、研究史的に見ても決して十分な蓄積と深まりとを持っているとは言い難い。従って、かかる研究史の特質から、様々な亀太郎研究には重複して叙述される部分が多い。こうした事情に鑑み、重複しかつ共通する叙述部分は亀太郎研究の共有実績として捉えることとし、本稿においては、極力、分析対象とする論稿や研究書の中で他の研究とは重複しない、言わばその研究において特に特徴的な叙述分野と個所とに焦点を当てる事に意を用いながら叙述してゆきたい。

1 大友亀太郎研究史の振り返り

（1）各種雑誌への投稿論稿に見る大友亀太郎研究

① 足立英治〔1972〕「蝦夷の夜明けを告げた鐘―札幌・創成川の建設者・大友亀太郎の偉業と生涯」『日本及日本人』政教社、金尾文淵堂

この論稿の「はじめに」で、足立氏は「この創成川は、……大友亀太郎を中心とする幾多の先人たちの誠実と地味な努力によって、私たちに残されたものである。しかし、これを果たして地元・札幌市民の幾割が知っているだろうか疑問の多いところだ。」と述べ、筆者と同様な問題意識より本稿を草していることが分かる。

亀太郎の北海道滞留は安政5（1858）年から明治3（1870）年の13年間だが、そのうちの8年間は今の函館を中心に開墾の仕事をしており、そこで妻帯し一男子をもうけ、次の4年間は札幌元町を中心とする開墾に力を注いでいる。／札幌での亀太郎に与えられた仕事は、石狩

原野の一角に二宮尊徳のやり方で模範的な御手作場（幕府の援助する開墾農場）を経営し、これを全蝦夷に及ぼしてゆくという遠大なものであったが、亀太郎はそこに居を定めるや直ちに用水路、道路、農地その他の工事の測量、設計、監督を行い、伐木開墾に率先して働いた（足立〔1972〕156頁一文中の斜線は改行を示す。以下同）。

本稿の中で注目されることは、亀太郎が当時札幌の地にあつて、「幕府からロシヤ産亜麻の種子の送付を受けて試作し、これが成功をおさめて、この方面の先駆となっている。」（足立〔1972〕157頁）、との記述が見られることである。実際にその後、札幌地区のみならず亜麻栽培は北海道全域へと発展してゆくのである。亀太郎は、この地で水稻の試作も行っているが、これについては成功していない。いずれにせよ、亀太郎のかかる事績は、当時の住民の生活保障の手段として、農業の定着に努力していたことの証左であろう。

② 安井敏彦〔1981〕「大友亀太郎の研究とその教材化」『史流』北海道教育大学史学会

本稿は、教育の側面から大友亀太郎の教材化を試みた論稿である。安井氏は、札幌市立元町北小学校に勤務する教諭である。

安井氏は、本稿執筆の経緯について、「昭和55年度から指導要領の改定によって、身近な地域の教材化が取り上げられるようになってきたからである。身近にあるものを教材化し、具体的なものから抽象的なものへ、経験から未経験のものへと広げていく、教育の原則による郷土の理解と指導が必然的に要求されてきたからであろう。」（安井〔1981〕110頁）、と記している。

亀太郎について教材化された指導案の「二、二宮尊徳の門弟子としての亀太郎」において、二宮尊徳と大友亀太郎との関係について、安井氏は以下のように述べている。

亀太郎は二宮尊徳の門弟子で同じ村の杉田藤吉という人の口ぞえにより入門を許されたが、畑人夫として昼は鋤鋤をとり、堤を築き、水路を開き、道路をつくる毎日が続いた。夜間に尊徳の教を請うたけれども、その時尊徳は病いのため、直接教を受けることは少なかったという。しかし、門弟子のひとりである富田久助の信頼を得て専ら彼から訓育を受け、修養に励んだ（安井〔1981〕111頁）。

この個所では、亀太郎がなぜ蝦夷地へ赴くことになったのか、その背景についての叙述が見られる。

尊徳の死後、尊徳の仕事は嗣子尊行に受け継れ、亀太郎も引き続き門弟の中にあって、高弟の富田久助に就いて報徳仕法³を学んだ。…尊徳の死後も、その幕府からの要請は続き、

³ 二宮尊徳の報徳仕法とは、主として北関東地域の領主層から依頼され、その一任をとりつけて行うもので、行政式仕法と呼ばれている。他方、報徳仕法の名声が高くなると、尊徳のもとで仕法の実際や原理を学ぼうとする人々がふえ、そのなかにはみづからの村と地域社会の復興のために努力し

安政5年になって、嗣子尊行がその要請（蝦夷地の実地検分と開拓仕法）を受け、門弟を蝦夷地へ送ることになった。そして選ばれたのが、相馬藩士新妻助惣、佐々木長左衛門、大友新六、そして亀太郎である。門弟となってわずか4年たらずで、幕府の重大な仕事を任されるに至ったのは、亀太郎の勤勉さや能さが高く評価されたためであろう（安井〔1981〕112頁、一部、引用者による文字の修正有り）。

脚注1において、大友亀太郎の姓について簡単に触れたところであるが、それについて本稿の「三、大友亀太郎の姓について」の個所でその詳細が記されている。

大友亀太郎文書によると「廿五歳ニシテ徳川家茂公ニ召抱ラレ金拾両ヲ賜ル」とあり、一農夫の身分から破格にも武士としてとりたてられ、幕臣となったわけである。……／この時、姓を飯倉から大友に変えている。いわゆる当時の慣しとして、例えば村田蔵六が大村益次郎と改姓したのと同じように、武士としてとりたてられた亀太郎も改姓して、大友亀太郎と名づかるようになった。／この大友の読み方であるが、一般には「おおとも」とされているが、正しくは「おおども」と濁るのである。その理由として三点上げられる（安井〔1981〕112頁）。

大友の呼称として正しいのは、「おおども」であるとの理由として三点挙げられているが、その一つ目の理由が、「改姓する時、出身地の西大友村にちなんで大友としたのであるが、その地域は「西^お^お^ど^も」と呼ばれていること。」（安井〔1981〕112頁一傍点は原著者）と、されている。他に二点、「おおども」と呼称する理由が提示されているが、筆者としては出身地の地名から、大友という姓を「おおども」と呼称するのが妥当な理由と考えるので、これ以上の言及は不要であろう。

③ Minoru Uchida, *HISTORICAL GEOGRAPHICAL CONSIDERATIONS CONCERNING THE REGIONAL CITY OF SAPPORO — City Planning in the Meiji Period* —, 『札幌大学女子短期大学部紀要』第13号(通巻33号), 1989年, 札幌大学

本稿は、英語で書かれた都市形成史論ないしは都市成立史論の観点からする、明治初期の札幌の都市計画論に関する論稿である。従って、拙稿の執筆目的からするなら、この英文論稿は厳密に言うとおおども研究論稿とは言えない。実際、本稿において、大友亀太郎に関する叙述は、次の個所に見られるだけである。「[この大友堀は、]旧胆振川と交差する地点近くに掘られた用水路であり、これは徳川幕府函館奉行所の役人であった大友亀太郎によって施工されたものである。」（Uchida, [1989] 26ページ, 邦訳は筆者。[]は引用者, 以下同）。本稿

ている地主・豪農層が少なくなかった（臼井勝美・高村直助・鳴海靖・由井正臣編〔2001〕797頁）。

は、英文による本文約7ページと最後に BIBLIOGRAPHY とを付した全8ページから成っている。9頁目には、日本語による英文論稿のレジюмеが付されている。日本語のレジюмеには、以下のような論題が付けられている。

「地方都市札幌の歴史地理学的考察—明治期の都市計画—」 内 田 實

厳密に言うと大友亀太郎研究論文とは言えない本稿を分析・考察の対象として取り上げる理由は、以下のような興味深い叙述が見られるからである。それは、大友亀太郎が陣頭指揮に当たり、施工掘削した「大友堀」を明治初期の札幌の都市計画論の中に位置付けて論述していることと、亀太郎がその志半ばで北海道を離れることとなった経緯とについて、他の論稿と比べてやや詳細に論及しているからである。

上記の第一の点に関して補足解説すると、札幌の最初の都市建設基本計画においては、南北の中心線（現在の「大通公園」と思われる）が實際上の南・北部地域と、磁針上の南・北地域とは一致しておらず、ずれていたというのである（Uchida, [1989] 26 ページ参照）。「こうした歪みが生じた理由は、島義勇⁴が最初に作成した〔札幌の〕都市計画で提起した枢要なポイントが、新たな居住村を建設するために掘削された用水路としての大友堀と並行する道路〔建設〕であったからである。」（Uchida, [1989] 26 ページ、邦訳は筆者）

亀太郎が北海道を離れ故郷の小田原へ戻ることになった原因については、他の雑誌論稿や単行本の研究書にも同様の記載が見られ、そこではほぼ一様に、当時の北海道開拓に関与していた二つの機関である明治初期の軍政機関としての兵部省（薩長藩閥）と、北海道開拓とその経営のための行政機関としての開拓使（佐賀藩閥）とが対立していたため、北海道開拓をめぐる方針が朝令暮改的にめまぐるしく変化することに亀太郎が嫌気をさしたためであろう、との推測がなされている。

この件に関して、内田氏は次のような認識を示している。「……屯田兵村に眼を向けて見ると、屯田兵村は軍政部門である兵部省の管轄下にあり、その時代、兵部省の指揮官たちは薩長藩閥の指揮下にあったと考えられる。そうして、〔これら薩長藩閥の役人と〕佐賀藩閥の役人からなる開拓使との間には対立があったと考えられる。開拓使役人は、目標として札幌の街区とは異なる方向に山鼻屯田兵村を建設したのである。その結果、北海道開拓には二重の権力構造ができたのである。」（Uchida, [1989] 26 ページ、邦訳は筆者）

他の雑誌論稿や研究書では、この件に関して、亀太郎が石狩原野の一角の開発に着手し始めた直後、突如この地方の開発が廃止されるという方針転換（その背景には兵部省と開拓使との

⁴ 島義勇（1822〔文政5〕～74〔明治7〕）開拓判官、札幌建設の創始者。肥前（現 佐賀県）藩士。……1857（安政5）年藩主鍋島直正の命により、箱館奉行堀利熙の近習となって蝦夷地、樺太を巡視した。この間に松浦武四郎とあって互いに意見を交換した。……1869（明治2）年藩主直正が開拓督務（のち長官）に任ぜられると彼は主席判官となった。まもなく、東久世長官にかわったが、彼は札幌本府建設の大任を受けた。同年11月、雪中の札幌に入り、地割りをおこない、役所を建て、また人を派して農商民を募った（北海道新聞社編〔1981〕833頁）。島義勇については、『新札幌市史』第二巻通史一の20～29頁の詳細な叙述も参照されたい。

対立がある)に際会し、亀太郎はやる気をなくして嫌気がさしたのであろう、という叙述と
なっている。内田氏の論稿では、山鼻屯田兵村の建設に関わらせて本件を叙述しており、この
点が他の論稿との相違点である。

④ 阪本一之 [2004]「札幌発展に大きく貢献した北海道最初の用水路・大友堀(現・創
成川)―大友亀太郎―」『開発こうほう』第495号,(財)北海道開発協会

阪本氏は、本稿の執筆趣旨を次のように述べている。「……大友亀太郎の創成川掘削を再評
価するとともに、運河利用の源流といわれる京都の高瀬川をたどってみた。」(阪本 [2004] 31
頁)

それでは、阪本氏は何故上記のような問題意識のもとに本稿を執筆するに至ったのか。これ
について、同氏は論稿の冒頭において、以下の如く述べている。

箱館奉行の命を受け開墾の場所を、現在の札幌市東区(旧・元村)に決めた亀太郎は「御
手作場」を作り、農民を入植させることにした。／亀太郎はまず入植する人々に水稻を栽培
させようと考え、かんがい用水の確保のため、慶應2(1866)年に用水路を掘削した。／こ
の用水路は北海道最初の大規模用水路であったが、当時、水稻栽培は、厳しい寒冷地の環境
に耐え得る品種や栽培技術が開発されていなかったため成功せず、試作段階にとどまり、用
水路としての効用を発揮することはできなかった。／しかしその後輸送路や生活用水として
機能することにより、元村に農民を定着させ、札幌市民の食料補給地とする重要な役割を果
たした。／この用水路を人々は、大友亀太郎の名をつけて「大友堀」(現・創成川)と呼ん
だ。／その後、札幌[本府]開府により大量の生活必需品や建設資材などの輸送が必要に
なったが、当時は鉄道はもとより、まともな道路もない時代のため、京都の高瀬川が江戸時
代から多くの物資を舟で輸送して、京都の発展を支えたことをヒントに、創成川の舟運によ
る食料や資材などの輸送を計画し、大きく利用された(阪本 [2004] 31 頁)。

要するに同氏は、運河として掘削された京都の高瀬川と関連づけて、後に運河としても利用
されるようになる「創成川」について論述しようとしたと考えられる。

京都の高瀬川について、阪本氏は「文豪・森鷗外の小説「高瀬舟」で全国的に名が知られる
高瀬川は、二条木屋町付近の鴨川より取水し、京都の中心部を流れ東九条の西南で鴨川にいつ
たん合流し、再びそこから竹田を経て伏見・三栖で宇治川に合流する日本最初の本格的運河で
あり、江戸時代には京都と大阪を結ぶ交通の大動脈であった。この有名な高瀬川の掘削を幕府
に建議したのは、当時の豪商・^{すみのくらしやうい}角倉了以であった。」(阪本 [2004] 32～33 頁)、と記している。

高瀬川の掘削を建議したとされる角倉了以(1554～1614)とは、以下のような人物である。

織豊期・江戸初期の朱印船貿易家。^{どそう}角倉^{そうけい}の一族で、父は土倉^{おおい}の吉田宗桂。京都の人。……国
内諸河川の開発に従事し、1606年大堰川をはじめ富士川・加茂川を疎通させた。また高瀬川

を開削し、京都・伏見の水運を開通させた（朝尾直弘・宇野俊一・田中琢 [1997] 579 頁）。

〔高瀬川〕の掘削は慶長 16（1611）年に着手し、全工程（約 10 km）を 3 区に分けて工事を進め、舟入を 9 か所つくり荷物の積み降ろしや船の方向転換をやりやすくした。膨大な工事資金は自弁し、苦労のスエ 3 年後の慶長 19 年に完成させたという（阪本 [2004] 33 頁）。

京都は内陸にありながら日本の首都として長く寿命を保ち得たことには、この運河によって、水陸の交通の要衝となり、京都の商品流通を促進したことに負う所が大きい。／この角倉了以の構想の大きさと度量の広さで掘削した高瀬川運河は、その後日本の運河づくりのパイロットとして日本各地に影響を与えた（阪本 [2004] 34 頁）。

角倉了以の構想による高瀬川運河の建設と、運河としての創成川とを結び付ける具体的な論拠を阪本氏が提示しているわけではないが、実際に、後の創成川が以下のような経緯を経て札幌発展の原動力となったことは事実であろう。

その後、明治 3（1870）年に開拓使は北 6 条より下流〔の大友堀〕を直線に茨戸まで通じるように新川を掘り、これが現在の創成川となった。明治 7 年運河として完成し、岩村判官⁵により「創成川」と命名され、人や馬の力による引き舟の水上輸送が行われ、札幌発展の原動力として大きな役割を果たした（阪本 [2004] 34 頁）。

以上、阪本氏の論稿を分析してきたが、本稿が大友堀とその後継である創成川とを運河としての視点から考察したことは、亀太郎研究の今後の研究課題の一つとして示唆を与えるものである。

⑤ 三田村昭吾 [2016] 「『二宮尊徳』・『大友亀太郎』に見る『報徳』の考えと行動～札幌・創成との関連～について」『北海道の文化』第 88 号、北海道文化財保護協会

本稿は、著者の三田村氏が「……尊徳の愛弟子となった大友亀太郎の業績を探るべく、札幌に本社のある「北海道報徳社」、「札幌村郷土記念館」、「札幌市資料館」を直接訪問し、分かったことを記し」（三田村 [2016] 33 頁）たものである。言わば、亀太郎に関係する記念館や資料館を訪ねて行われた聞き取り調査の内容を、三つの視点からまとめて発表されたものである。

論稿の項目名に従って示すと、三つの視点とは、以下の三点である。

- （１）尊徳（報徳社）の考え方の影響
- （２）大友堀の設置と課題
- （３）帰道に至る顛末と課題 ～島義勇との関係的とらえ～

三田村氏の論稿に対する分析については、（３）の亀太郎がなぜ北海道から故郷の小田原へ帰らざるを得なかったのか、その歴史的顛末を今一步深く追究してみようと思う。というのは、筆者が大友亀太郎研究への取り組みを開始するに当たり、最も興味・関心を抱いた問題意

⁵ 岩村通俊（1840～1915）明治期の官僚。高知県出身。鹿児島・沖縄などの県令の後、1886（明治 19）年初代の北海道長官となり、土地私下規則を公布（朝尾直弘・宇野俊一・田中 琢 [1997] 89 頁）。

識がここにあるからである。

以下において、本件について三田村氏の論稿（３）の叙述を二つに分割して分析してみたい。

Ⅰ 亀太郎が、幕府の箱館奉行所役人として石狩中央部開拓に取り組んだ時代 → 明治維新変革後兵部省役人として同地開拓に取り組んだ時代

亀太郎は、幕府の役人（農民から武士への昇格）に、旧函館奉行所で任命され、石狩中央部の開拓へと邁進した。／報徳・分度（徳を以って人に接し、自分の立場・役割・地位をよく認識し、部下を大切に扱い、協力し合って開拓をすすめる）の精神を最後まで貫いた。／しかし、時は明治新政府となり、彼は兵部省傘下に入り、引き続き開拓・移民促進役を担った。／幕府同様、明治新政府も当初より、財政難であったが、かかる状況下でもロシアの南下策には対抗せざるを得なかった。／新政府は、「兵部省」による南下対抗をふまえた開拓と、そのための移民政策をとる一方で、不平士族の反乱をおさえるため、旧士族層を活用すると言う「二重政策」を取らざるを得なかった。これを別の観点から見れば二つの省庁による「分断政策」による新政府への士族反乱を防ぐと言う、苦肉の、しかも周到な方途だと云えるかも知れない（三田村〔2016〕37頁、傍点は引用者）。

Ⅱ 亀太郎が、維新変革後の不安定な政治状況の中で兵部省役人として、当別の開拓に取り組んだ時代

亀太郎は、かかる政治状況の中で兵部省の役人として、今度は当別の開拓と移民促進を命じられた。／そのための武士団として、旧幕府側についた「会津藩」の下級武士団三十名を率いての移民と開拓であった。／積雪寒冷な中、困難を極めた開拓に着手すると間もなく、開拓中止、武士団引き揚げの命令が下された。その間の事情は、開拓使、島義勇判官と兵部省の確執にあった。……／亀太郎はこの状態を見聞した時、自分の考える報徳の考えと、大きく異なる現実を見せつけられた。／兵部省より、当別からの撤退命令が出た（その内容は旧幕府軍である会津藩士の扱いが中心）時、即時に辞表を提出した（三田村〔2016〕38頁、傍点は引用者、下線部も同じ）。

上記二つの文章Ⅰ、Ⅱは、三田村氏の論稿（３）の連続する文章を、時代経過の順に分割して提示したものである。但し、Ⅰの文章の末尾個所は含まれていない。Ⅰ、Ⅱは、分析・考察をするために筆者が付した記号である。それでは、以下においてⅠ、Ⅱの順に同氏の叙述内容を分析してみよう。

Ⅰの前半部は分かり易いが、少し分かりづらいのはその後半部の叙述である。「新政府は「兵部省」による南下対抗ふまえた開拓と、……周到な方途だと云えるかも知れない。」の個所がそれである。

この個所を読み解けば、その言わんとするところは以下のような文章構造となっていること

が分かる。

〈明治新政府発足直後、その軍政機関・兵部省が行使した二つの政策＝「二重政策」〉

① 北方からのロシアによる北海道への南下政策に対抗することを踏まえた北海道開拓と、
そのための移民政策

② 維新変革後の不平士族の反乱を抑える目的で実施する、旧士族を活用する政策

三田村氏は、上記①、②の「二重政策」についての叙述に続けて、「これを別の観点から見れば二つの省庁による「分断政策」……」，という表現をしている。「二つの省庁」という表現をこの個所で使うことは、二重政策の①と②とがそれぞれ別の省庁が担当する政策であるかのような誤解を招くものと思われる。

次に、Ⅱの文章を分析してみよう。この文章でポイントとなることは、維新政府による旧幕府側についた会津藩士の処遇をめぐる様々な思惑や意見対立があったことが窺われることである。このことをめぐり、開拓使判官・島義勇と兵部省との間に対立・確執があったとされているが、島義勇が旧会津藩士の処遇について具体的にどのような考えを持っていたのか、についての叙述は見られない。

本稿の最後の方で、本件について三田村氏は、「もう少し省察を加えると藩閥新政府の内部（薩・長 対 佐賀・土佐）対立の姿を見て、[亀太郎は] 嫌気がさしたものと取れる。」（三田村 [2016] 39 頁），と記している。また同氏は、開拓使判官・島義勇と「新政府が目指す開拓方策とは、時に齟齬を来し、対立した。」（三田村 [2016] 38 頁），との認識も示している。

こうして三田村氏の論稿を分析して思うことは、維新変革後の未だ政治状況が不安定な中（例 各地士族の反乱 北海道へのロシア南下に対する脅威 等），明治初期の北海道においては、上記の二つの脅威への対応策について、維新政府中枢を占める役人の間でも、またその出先機関としての兵部省・開拓使（庁）役人の間でも、北海道開拓の必要性を十分に認識しながらも様々な意見対立があり、その反映として上述の如き政治状況が生まれたものと考えられる。こうした変転極まりない歴史の過渡期を生きた大友亀太郎は、まさしくその犠牲となったと考えてよいだろう。

最後に、Ⅱの文章には旧幕府側について新政府軍と最後まで戦った会津藩士のことが記されているが、維新直後、時の新政府が旧会津藩士の動向に神経をとがらせると共に、その処遇についていかに苦慮していたかが窺われる。

⑥ 伊藤瑞叡 [2012] 「札幌開拓三恩人と妙見山本龍寺」 妙見山 本龍寺

本稿は、雑誌投稿論文ではなく、札幌本龍寺住職・伊藤瑞叡^{ずいゑい}氏（1942～2020）著述による寺院が発行したユニークな論稿である。脚注 6 において、筆者が「資料受け取りと聞き取り調査を行うため、本年 3 月本龍寺を訪問した……」，と記した中の「資料」がこの論稿である。著者の伊藤氏は、前述の如く札幌本龍寺住職であるが、同氏は立正大学仏教学部仏教学科教授でもある。同氏は、東大大学院（修士・博士課程）で印度哲学を専攻した学術研究者である。

本稿は、その標題から推測されうるように、幕末から明治初期にかけての札幌の開拓に貢献した三人の恩人と^{みようけんざん}妙見山本龍寺との関係を中心に論述されている。同氏が札幌開拓の立役者として認識している人物とは、二宮尊徳・大友亀太郎・島義勇の三人である。

ここでは、「二 大友亀太郎翁の生涯と業績とその精神」と題する個所の後半部「その思想と精神」の論述内容の分析・考察をすることとしたい。

大友亀太郎は、……、21歳のときに「金銀に富めるのみが^{とみ}富なのではない。積善の道こそまことの富である」と考えて、22歳の春に家を出て、二宮尊徳先生に入門しております。／積善とは二宮尊徳先生の実践哲学の根本にある報徳に帰結します。善とは何かと申しますと、……、「順逆いづれにもせよ、人々や天地より受けた恩徳に正しく報いる」という報恩の精神、報徳の実行にはほかならないであります。／善を積むとは、報恩の人倫道德が報徳の経国済民（＝国を治め民を救う）へと調和し進展して、始めて実現するのであります。……／経国済民はともあれ、開拓殖産は勤労と技術を必要とします。技術は勤労の一部であります。「勤労による報徳」、これこそが自然の道理や仏法にかなった、人の生きる正しいまことの道として、尊徳先生によって示されたところであります／それを亀太郎は、北海道でも故郷でも実行したのであります。／これは、知識と技術とを一步一步少しずつでも習得してゆこうとする勤勉さのあらわれであります。／かくしてこそ、亀太郎は人の住めないと見られていた酷寒の未開地を開拓し、入植の人々をして定住を可能にするという、たしかな成果を上げることができたのであります。……／それは尊徳先生の教えである「勤労による報徳」を本義とする生活の仕方、いわゆる報徳仕法をば、たしかなものとして自らに継承し、自ら実践した最も勝れた成果であるとするべきであります。／報徳仕法（＝勤儉・分度・推譲）の実践思想にもとづく習学・計画・開拓・殖産の精神こそ、亀太郎翁のそれであると申せましょう（伊藤〔2012〕6～7頁、傍点、ゴシック体は原著者）。

上に見た如く、伊藤氏は亀太郎の思想（＝人生観）や勤労観というものの根底には、二宮尊徳の「報徳仕法」の実践思想が根差していると考えている。これをパラフレーズするなら、こうした尊徳の「報徳仕法」の実践哲学が、亀太郎によってより具体的に展開され実践されたものが、「習学・計画・開拓・殖産の精神」へと昇華した、と理解して良いのではないか。

因みに、本龍寺とは、明治4年3月3日創立の日蓮宗系の札幌最古の寺院である。

（2）単行本研究書に見る大友亀太郎研究

① 札幌市立元町北小学校編〔1977〕『郷土誌 元町北—大友亀太郎をおって』札幌市立元町北小学校

本書出版の経緯として、その「編集後記」には次のような記述が見られる。

人口が集中し、都市が巨大化して行くに従って、居住している住民の郷土に対する愛着心や、郷土への興味や関心が希薄になっていくといわれています。／私達の街「札幌」にも、ご多分にもれずこの様な傾向が出て来ており、……残念ながら現実のようです。／この元町北小学校の地域は、歴史素材に、郷土の教材に比較的恵まれた地域です。／原始そのままの河川や森、古老に語りつがれている生々しい開拓の秘話、郷土の発展と先人の苦労をありのまま見せてくれる文化遺産や伝承、そして建造物や史蹟など。／今回教職員全員の執筆によって、三、四年生を対象にして郷土誌を発行したのも、郷土に対する意識の高まりと共に、地域を通してのものの考え方や見方の能力の育成を念じたからに、ほかなりません（上掲書、131頁）。

本書出版の経緯を読み、すぐに類推される論稿が1の（1）②で取り上げた安井敏彦氏の[1981]「大友亀太郎の研究と教材化」である。上掲書出版に至る問題意識と安井氏によるそれとは共通したものがある。ただ一点異なる点は、安井氏が当時の教育界における動向の視点から『郷土誌』作りブームを捉えていることである。同氏は、次のように述べている。

もう一つは教育界の中からである。昭和55年度から指導要領の改定によって、身近な地域の教材化が取り上げられるようになってきたからである（安井[1981]110頁）。

本書の内容に関しては、以下の二点について触れておきたい。これら二点については、他の雑誌論稿にはその叙述が見られないからである。これら二点は、いずれも本書の「五 座談会・古老に聞く一開拓当時の思い出」の個所に見出される。座談会出席者はいずれの方々も、亀太郎がその礎を築いたとされる元町（札幌市東区）にゆかりのある方々である。

まず一点目に注目したいことは、座談の中で高木氏が、亀太郎による元町開拓の真の目的について言及していることである。同氏の言うところを聞いてみよう。

「……札幌市を開こうというつもりで、札幌市そのものを作るために元村〔後の札幌市東区元町〕に根きょを置くというような考え方では、大友さんは当時はなかったのではないか。／大友さんがこっちに来られた目的は、札幌市造営のために命令が出たのではなくて、石狩地域の開こんのために来たわけですね。最も適当な所に、根きょになる中心の所はどこかと言うことで、あえて、伏古川の一番沖積土の面積の広い所が適当なんだと考えて決めたんだと思います。そして、ここを親村^{おやむら}として模範農場（お手作場）を作って、それから、各地の適当な所を開拓し進める。これが大友さんの構想だったと思います。」（上掲書、106～107頁）。

当時、亀太郎が木古内、七飯（鶴野）地区での開拓手腕を認められ、箱館奉行により「蝦夷

地開墾^{がかり}掛」,「石狩場所農夫取立^{とりたてくりこみかた}繰込^{くりこみ}方」そしてその命を受けたことを考えると、高木氏の認識が妥当であるように思われる。この様に考えると、内田實氏が亀太郎の「大友堀」を都市計画論の観点から考察することは、あくまでその後の札幌という街の都市形成史論の中に位置付けて論述することが可能になった、ということであろう。亀太郎自身による開拓構想としては、「大友堀」の掘削工事は、広い意味では蝦夷地開拓と石狩場所開拓の一環としてのそれであった、そして狭い意味では当時の元村開拓のためのそれであった、と考えると良いのではないか。

二点目に着目したいのは、当時、亀太郎が抱いていたと考えられる信仰心についてである。本書の「三、札幌村の開拓と大友亀太郎」の「(3) 妙見^{みょうけんどう}堂」の個所には、次のようにある。

妙見堂は北十四条東十六丁目にある本龍寺の境内の中に、ひっそりと建っています。ここは、元村街道に面しており、近くには大友亀太郎の役宅や、旧札幌村役場などがあった所で、元村開拓の中心地でした。村の人達からは「妙見さん」⁶と呼ばれ、今でも親しまれている妙見堂は、慶應三（1867）年八月に、元村が広く栄えますようにと祈って、大友亀太郎が建てたものです（上掲書、54～55頁）。

上の文章に続けて、その内容には疑念があるものの、次のようにある。当時、亀太郎は悪い眼病⁷にかかり、苦しんでいた時、本道開拓の祖島判官がこれを見て気の毒に思い、自分のかぶとの上にまつってあった、妙見大菩薩の像を取って「これを信仰せよ。必ず治る」といって亀太郎に渡したそうです。亀太郎はこれを信じ、一心に祈念したところ左の眼病が治り、失明せずに済んだそうです。／亀太郎は、その恩に報いるために、慶應四（1867）年四月に妙見堂を建て、その妙見大菩薩を村の守護神として祀ったというのです（上掲書、55～56頁参照）。

「大友亀太郎と信仰」という視点から亀太郎の信仰心（宗教）を考察する時、彼が道南の「鶴野^{つるの}」（現七飯町鶴野⁸）地区の開墾に従事していた際、馬頭観音を建立していることにも触

⁶ 資料受け取りと聞き取り調査を行うため、本年3月本龍寺を訪問した際、寺院の職員が「この「妙見さん」とは、「北斗七星」のことです」との説明をして下さった（2025年3月6日、於本龍寺）。この本龍寺境内の一角にある妙見堂に収められている「妙見大菩薩」の仏像は、上記の「妙見さん」を信仰の対象として拝するため具現化されたものと考えられる。上記寺院職員のお話によると、本龍寺を寄進したのが、大友亀太郎だということである（2025年6月19日、電話調査）。

⁷ 亀太郎が、当時、悪い眼病を患っていた理由について、『郷土誌 元町北』の「五 座談会・古老に聞く」の司会者と山本氏との間に、次のようなやり取りがある。「司会 開拓当時の話を聞くと、目が悪くなるというのは、煙がひどかったせいでしょうか。／山本 そうですね。煙の中で暮している様なもんですからね。大友亀太郎さんも目を悪くしたのは、作業もひどかったけれど、やはり、煙のせいでしょうね。」（上掲書、92頁）

⁸ 大友亀太郎が木古内地区での開墾後入地したとされる「鶴野」地区に関する叙述には、同地区が、「旧大野町鶴野」という認識で書かれているものと、「現七飯町鶴野」という認識で書かれているものが混在している。これには、次のような歴史的経緯が関係しているものと考えられる。すなわち、明治10（1877）年時点において、当時の鶴野は大野村（後の大野町）の区域内にあり、明治18（1885）年になって鶴野は大野村から分かれて七飯村と合併し、現在に至っているからである。従って、亀太郎が入地した鶴野は、現在の七飯町の行政区域内にある。本件についての詳細は、拙著〔2024〕221頁を参照されたい。

れておく必要があるだろう。

『郷土誌 元町北』には、次のような一節が見られる。「また、亀太郎は仕事をしに行く途中、乗っていた馬が泥道にはまり倒れ死んでしまいました。この馬のために「馬頭観音」という馬をまつ碑を建て、死んだ馬をまつりましたが、亀太郎は仕事ではとてもきびしい人だったようですが、こんな優しい心の持ち主でもありました。」（上掲書、36～37 頁）

かくの如く、亀太郎の信仰心には、「妙見さん」（＝妙見菩薩像）と「馬頭観音」⁹ とに対するものが見られる。現在の七飯町鶴野地区には、堂内に妙見菩薩像が安置されている鶴野妙見堂と、馬頭観音が安置されている鶴野馬頭観音堂との二つが、現存している（札幌村歴史研究会編 [1982] 36 頁写真）。

② 札幌村歴史研究会編 [1982]『東区今昔「大友堀」』札幌市東区役所総務部総務課

本書の「序にかえて」の執筆者・東区長の遠藤高志氏（当時）によれば、本書は、次のような経緯から発刊された。

この“東区今昔「大友堀」”は、三度にわたる大友堀発掘調査を契機に、直接その調査研究にたずさわった“札幌村歴史研究会”の皆さんに原稿を依頼し、現在知り得る大友堀について、一冊の本にまとめたものです。／昭和四十七年四月一日、札幌市が政令指定都市になり、東区が誕生してはや十年、本書は区制十周年を記念し、ここ東区、さらには札幌の歴史の原点とも言える大友堀のすべてを伝え、将来、さらに詳細な史実が付加されていくことを願い発刊いたします（上掲書 [1982] 5 頁）。

本書の構成を簡単に記すと、大きくⅡ部構成からなっている。Ⅰ部の「札幌の開拓」では、他の雑誌論稿や研究書の叙述に共通して見られる、幕末の北海道史と関連づけて、大友亀太郎の蝦夷地における活動の実態が記述されている。Ⅱ部の「大友堀発掘調査報告」においては、札幌村歴史研究会のメンバーによる「大友堀」として掘削された用水路の遺構調査報告が記載されている。こうした調査報告は、他の雑誌論文や研究書には見られない唯一のものであり、このことが本書出版の大きな意義である。

まずⅠ部の内容については、特に以下の二点の叙述が興味深い。すなわち、第一に、土木技術者としての大友亀太郎が、その測量技術の面においても力量を発揮したということである。本書の中で「測量器」という見出し項目を付された個所に、次のような文言が見られる。

この土木工事に使用された測量器は、現在小田原市西大友に住む四代目の大友和夫さん宅に残されている。小方儀、象限儀、分度器、定規のほか「高低測量法」と書かれた書物が一

⁹ 馬頭観音については、拙稿 [2023] 18～19 頁、拙著 [2024] 67 頁、69～70 頁を参照。

つの箱の中に納められている。測量器は真ちゅう製で、小方儀の裏には「天保十三年江府在大野規行」と刻まれている。この大野規行は幕府暦局御時計師で、当時最高の精密器械製作者であった。暦局とは天文学、暦学の研究や精密器械の研究、製作をつかさどる役所であった。伊能忠敬が「大日本沿海実測図」の製作にあたって用いられた測量器械は、大野規行の手によるもので、亀太郎の使用したものはさらに改良が加えられ、当代最高のものであったという（上掲書〔1982〕51頁）。

上記の文を読むと、亀太郎が幕府暦局の役人とも人的つながりがあったことを窺わせる。本件について、大友家四代目当主である大友和夫氏は、「亀太郎は小田原在住のころ、……尊徳の下に破畑人夫として入門が許され、入門後は幕府の直轄領である日光神領地に赴いたので、江戸幕府の暦局との接触も当然多く、当時としては最高の技術や学問を修得できたと思う。幕臣に取り立てられて蝦夷に赴くことになったので、その時幕府から与えられたのではないだろうか。」（上掲書〔1982〕52頁）、と語っている。

文中の「破畑人夫」とは、土木技術者のことである。いずれにせよ、亀太郎が最初に測量術を含む土木技術全般について指導を受けたのは、師である二宮尊徳からであるから、土木技術者・大友亀太郎にとっての師匠は、尊徳と言ってよいであろう。¹⁰

土木技術者としての大友亀太郎については、筆者も興味関心のあるところなので、この件については後でまた関説することとする。

第二に、亀太郎が札幌を去るに至った当時の歴史的背景について、これまでも数本の雑誌論稿や研究書の分析を通じて何度か論及してきたところであるが、本書ではそれらのいずれと比較してもかなり詳細な把握を展開しているので、取り上げたい。

「亀太郎 札幌を去る」の項目において、次のように記されている。

島義勇が開拓判官として札幌本府の建設に乗り出すが、そこには前途多難な問題が残されていた。すなわち、それは開拓使が一元的に北海道を統治するというものではなく、兵部省、その他によって北海道の開拓を分轄して進めなければならない現実にあった。／明治元年、会津藩が降伏したとき、政府は降伏人三千戸を石狩地方に移住させ、開拓に従事させることとした。これを受け同二年、石狩、当別、小樽などを管轄区域とする兵部省は、長州藩士・井上弥吉を派遣して受け入れ準備を進めた。一方、開拓使は札幌に本府を築くため、東北、北陸に、吏員を派遣して移民の募集を進めていた。兵部省はもとよりこの地を降伏人の入植地の一つと考えていたので、島判官の先行を快しとせず、また、兵部省は薩摩、長州、開拓使は佐賀藩と、両者は藩閥の確執が強かったようで、札幌地方の二重支配を契機に相反目してしまう（上掲書〔1982〕61頁）。

¹⁰ 土木測量技術者としての二宮尊徳に焦点を当てた論稿には、以下のものがある。

井上三男〔2005〕「国土調査の先駆者 二宮尊徳」『測量』（月刊）7月号

兵部省は会津降伏人の移住地選定について、当別の現地調査を亀太郎に命じた。探查を行って石狩役所に帰り状況復命を行ったので、当別を適地と決め開墾に着手することとなった。……十二月、石狩川の結氷期を待って会津藩士および木こり百余人を伴って氷上を渡り、雪の原野を測量し、移住者の家屋を建てる木材を切り出していたが、突然、会津降伏人の入植は中止することとなった。／開拓使と兵部省の衝突の原因は、政府が希望によって土地を分与して開拓させたことにあり、それに加えて藩の感情の対立、権力の確執にはかならないのである。／会津降伏人の当別入植は中止となつて、酷寒に耐えながら雪深い当別の山野で受入れの準備を進めていた亀太郎は、土地を開拓使に引き継ぎ、木材は外務省に引渡した（上掲書〔1982〕62～63頁）。

原始未踏の山野に、仮寝の露にぬれ、星を仰ぎ月を眺めて、また、酷寒にさらされ、野獣に怯えながら苦難に耐えて、開削した大友堀を中心に開かれた御手作場は、近代北海道農業の基礎ともなり、また、大友堀は札幌本府建設に重要な役割を果たした。偉大な足跡は実に賞讃すべきであるが、彼は相次ぐ制度の変遷や、計画の変更、それにも増して異常なまでの権力闘争や醜い派閥の確執のため、肝心な開拓が遅々として進まないことに、大望を抱き蝦夷地に渡った彼にとっては悲憤慷慨を禁じ得なかったであろう（上掲書〔1982〕63～64頁）。

近代日本の幕開けへと繋がる幕末から明治維新変革の時代に、幕臣として蝦夷地に入った大友亀太郎であったが、維新変革後の余燼が未だ収まりきらない不安定な社会の渦中に遭遇した事は、彼にとって不幸なことであったと言えよう。それにしても、維新変革に関わる史実としてあまりにも有名な、明治新政府にとっての賊軍としての会津藩士に対する薩摩・長州両藩の感情的しこりの強さを、上記の一連の文章から看取できる。

次に、本書の大友堀発掘調査報告について一瞥を与えておこう。本書によれば、大友堀があったと想定される遺構の発掘調査が行われたのは、1980（昭和55）年1月～8月22日にかけての期間のことである。このことについて、本書の表紙に続いて綴られている大友堀の遺構発掘過程に関する写真とその解説には、次のようにある。

大友堀は、謎につつまれていると言ってもよい。その全体像は文献で知らされてはいるものの、事実は非常に不鮮明な部分が数多く残されていた。／かくして、昭和五十五年一月、大友堀の流路の一部を発掘調査する機会を得て、全ぼうとは言えなくともその概要を知ることができたのは大きな成果である。／文献による堀は、深さ一・五メートル、上幅一・八メートル、底〇・九メートルとある。しかし、発掘された断面は深さこそ同じであるが、これより規模が大きい。堀をもっぱら水路として利用するため、明治二年開拓使が改修したためだろう（上掲書〔1982〕写真掲載の1頁目）。

本文に入ると、「堀の名付け親」、「堀の目的」、「大友堀の流路を探る」、等の視点から書かれた叙述が続く。これら三点については、これまでいずれもその実態が今一つ不分明であったからだと思われる。

ここでは、亀太郎が大友堀を開削した目的と、その実際の使用のされ方についての叙述を見ておこう。この件について、発掘調査に関わった札幌村歴史研究会のメンバーによる分析結果が、以下のように提示されている。

彼〔大友亀太郎〕が体で学んできた報徳の仕方は、単に農業生産を高める技術や人づき合いの作法でなかったはずで、今の用語におきかえれば農業を生産の基盤にすえた地域社会の総合建設計画とでも呼ぶべきもの。彼はこの仕方を、用水路を中軸にしてサッポロの大地で展開しようとしたのである。……大友堀は時とともに、その役目をかえていったことになる。本村からみると、堀は三つの時代を経験したと言えよう。

- ① 灌漑用水時代（慶應二年から明治二、三年まで） 水田の用水と湿地排水の役割
 - ② 運河時代（明治三、四年から六、七年まで） 物資の運搬水路の役割
 - ③ 排水路時代（明治六、七年から大正十四年まで） 湿地排水、生活污水の排水の役割
- （以上、上掲書〔1982〕88頁）。

現在、札幌市の東西の基点として位置づけられている「創成川」の前身としての「大友堀」が、亀太郎によっていかなる目的と展望とに基づき掘削されたのか、ということを確認しておくことは、札幌市の都市形成史論を論じる上で重要な論点となるであろう。

③ 小野洋一郎編著〔1986〕『報徳の人 大友亀太郎』北辰堂

まず、本書がいかなる趣旨のもとに著述されたものであるかを、編著者である小野洋一郎氏の言に聞いてみよう。本書の「おわりに」において、同氏は以下のように述べている。

記述の内容については、大友亀太郎自筆の自伝を軸として、『蝦夷地開墾掛・二宮尊徳門人・大友亀太郎』、『札幌村史・大友亀太郎小伝』、『郷土誌 元町北―大友亀太郎をおって』、『叢書・東区今昔』等の図書をも参考にして書き進めました。

あくまでも史実を正確に伝達すること。

できるだけ亀太郎の人間性に迫ること。

なるべく表現を簡潔平易にすること。

この三点を記述の方針としました。往時の趣が残るようにと、意識的に漢文体などの古い文体を掲げて置いた所もあります（上掲書〔1986〕163頁）。

上記の著述方針並びにその著述手法を見て分かるように、本書は、単行本としての亀太郎研

究書の中で、最も学術研究書としての質を備えている書である。何より、大友亀太郎研究の原典たる「大友亀太郎文書」に含まれる古文書としての亀太郎自筆の自伝を、その古文書の解説を通じて論述を展開していることが本書の大きな特徴である。

それでは、本書の内容分析に入ってゆこう。本書の目次によれば、それは二部構成となっている。一部は「二宮尊徳の報徳思想」、二部は「大友亀太郎の生涯」となっている。これら二つの叙述分野を見て驚くことは、二部が占める圧倒的な紙数上の存在感である。一部が占めるのは、その標題である「二宮尊徳の報徳思想」のみの叙述となっているのに対し、二部のそれは、何とその標題の下に10項目を立てて記述されているのである。これを見れば、編著者による本書に対する重点の置き所がどこにあるかは、一目瞭然であろう。

一部の「二宮尊徳の報徳思想」については「2 今後の研究課題」の個所で後述することとし、ここでは二部の中で特に特徴的な叙述に焦点を当てることとしたい。

二部10項目中、その紙数の多い順に並べると、以下の通りとなる。

- | | |
|---------------|------------------------------------|
| 1位 維新の荒波 30頁 | 2位 大友堀の開削と札幌村の開基 24頁 |
| 3位 蝦夷地の状況 16頁 | 4位 思想的旅立ち、幕命で蝦夷地へ、石狩平野の開拓計画、最期 12頁 |
| 5位 故郷での生活 10頁 | 6位 生いたち、北海道を去る 8頁 |

この後、最も多い紙数が割かれた1位の「維新の荒波」について論及することとしたい。こままでの行論の過程においても、亀太郎が「維新の荒波」に遭遇することにより、不本意な形で、その開墾と開拓とに情熱を傾けた蝦夷地（後の北海道）を家族共々後にすることになった経過について論及してきた。とりわけ、その主要な理由として取り上げてきたのは、幕末から維新変革時における蝦夷地（北海道）の統治機関として並立した二つの機関、すなわち、開拓使と兵部省という新旧二つの機関が、北海道統治をめぐり権力闘争をしたことにあった。本書においても、上記の経過について詳細な叙述（小野洋一郎編著〔1986〕119～122頁）がなされているが、亀太郎が故郷へ戻ることになったもう一つの理由として、実母の病気が挙げられている。北海道を去る直前、亀太郎が所属していた当時の外務省へ提出した実母の病気を理由とする（筆字による本人自筆の）退職願が存在する（小野洋一郎編著〔1986〕123頁）。こうして考えて見ると、亀太郎が北海道を去るに至った理由としては、兵部省と開拓使との権力闘争に嫌気をさしただけでなく、実母の病気に対する懸念も相俟っての決断だったのかもしれない。

北海道から故郷の小田原（神奈川県）への帰途につく直前、亀太郎が残したとされる興味深い漢詩が本書に提示されている。本書には、こうある。

亀太郎は、明治三年六月二十六日、妻子を伴い札幌を去って行ったが、札幌村を去るに際して、妙見堂に書き残した筆跡に、王晶齡の漢詩「西宮秋怨」がある（上掲書〔1986〕122頁）。

西宮秋怨

芙蓉不及美人粧
水殿風來珠翠香
却恨含情掩秋扇
空懸明月待君王

西宮秋怨

王昌齡

芙蓉も及ばず 美人の粧い
水殿 風來つて 珠翠香し
却つて恨む 情を含んで 秋扇を掩い
空しく明月を懸けて 君王を待つを

この漢詩は、王昌齡による漢の成帝の寵妃、班婕妤の悲哀と怨念とに寄り添った詩である（小野洋一郎編著 [1986] 124 頁参照）。王昌齡（698～755）とは、盛唐時代の詩人である。漢詩の詳細な解釈については、省略したい。

亀太郎は、落莫として去りゆくわが身を美人班婕妤になぞらえて、万感胸に迫るものがあつたのであろう（小野洋一郎編著 [1986] 127 頁）。

亀太郎に漢詩の素養があつた背景として考えられることは、師である二宮尊徳の思想の影響があつたことが推測される。というのは、佐々井信太郎氏の著 [1927] には、尊徳の思想内容を構成するものとして「儒・仏・神」の三つの思想、すなわち「儒教・仏教・神道」思想があつたことがその著全編に亘って述べられているからである。

（3）市町村自治体史に見る大友亀太郎研究

最後に、亀太郎が蝦夷地の開墾のため入地した道南地方の現木古内町・旧大野町（現北斗市）・七飯町・札幌市が発行する『市町村史』の叙述を通じて、亀太郎の北海道における足跡を辿ってみることにしよう。

亀太郎が北海道開拓のため入地した順に、その地域の自治体史の亀太郎に関する叙述を見てゆくこととしよう。『新 木古内町史』には、次のようにある。

安政 5（1858）年に幕吏・大友亀太郎らが、箱館奉行所より「箱館在木古内村開墾場取扱」の役職を命ぜられ、越後地方から移民を募集して中野と瓜谷の開拓を開始、明治 18（1885）年及び 19 年には旧庄内藩士族 105 戸が集団移住し、農業開発の基礎が築かれた（上掲書 [2023] 32 頁）。

木古内の農業は、安政 5（1858）年に幕吏・大友亀太郎と相馬藩士・新妻助惣の両名（両名ともに二宮尊徳の門下）が、箱館奉行所より「箱館在木古内村開墾場取扱」の役職を命ぜ

られ、越後地方から移民を募集して中野と瓜谷¹¹を開拓したことに始まる（上掲書〔2023〕478～479頁）。

安政5年（1858）・幕臣大友亀太郎らが越後より移民24戸を募集し、中野、瓜谷に入植。田畑34町歩を開墾（上掲書〔2023〕1080頁）。

上記三つの文章には重複する部分も多く、最新の木古内町史である上掲書に見られる亀太郎に関する叙述はこれら三個所にとどまる。

木古内村の次に亀太郎が入地した場所は、大野村である。『大野町史』の叙述を見てみよう。

開拓者誘致の方法として第一に試みられたのは、士族や浪人を屯田兵にならって兵農を兼ねて募った¹²が、期待したほどの成果があがらなかった。／第二にあげられるのは、御手作場と称する補助制度で、半官半民経営とも見られるこの営農形式は、相当の効果を収め、有名なものは……などがあり、鶴野郷・中島郷・飯田郷・城山郷・藤山郷（以上七飯町）・清水郷・吉田郷・三好郷（以上上磯町）など、いずれもこのケースに属して、当時代にできた大野平野内の農村であった。わけても鶴野は隣接地だけに、大野と経済的にも関係が深かったことが記録されており、相馬藩から派遣され、二宮尊徳の流れをくむ佐々木長左衛門・新妻助惣・大友新六らの人びとによって、開墾されたところである。……／[中島]辰三郎¹³に代って、大野の農事指導を担当した人に、大友亀太郎がある。亀太郎は相模国足柄下郡西大友（神奈川県小田原市）の生れで二宮尊徳門下である。箱館奉行は箱館付近の開墾を、尊徳に依頼する意図であったが、尊徳が死去したので、前記鶴野の開墾に当たった、前記の人びとが招かれたのであった。／亀太郎の渡道は前記の人びとと同じく安政5年であるが、初めに木古内開墾におもむき、大野在勤は文久元年から明治元年までの8年間で、この間48戸の農家を受け入れ、100町歩を墾成したということになっている。辰三郎は他村からの巡回指導であることに比べ、亀太郎は大野在住の人として、朝夕村の人びとと親しみ、その中から指導が行われたところに、この人のすぐれた身上がある。二宮尊徳の報徳精神の実践者

¹¹ 幕末時、亀太郎が木古内村に入り開墾したとされる「中野」、「瓜谷」という地名が現在も木古内町内に存在するかどうかを町役場に問い合わせたところ、「現在も存在する」との回答を得た（2025年6月27日、電話調査）。

¹² 「これまでの北海道移民史研究は、移民の中でも屯田兵、士族、囚人といったいわば特殊移民の研究にそのエネルギーの大半を費やしており、近代の北海道開拓の基本的原動力であり、とりわけ農業開拓の側面において圧倒的なエネルギー源を構成した「内地」からの「一般農業移民」と呼ばれる人々に関しては、ほとんど研究が進められていないように思われる」桑原真人〔1982〕62頁、傍点は現著者。

¹³ 中島辰三郎とは、「江戸の人〔で〕安政3年エゾ地在勤の勸農掛を命ぜられ、平野の農事指導に功労があり、農民の信望を博し〔た〕」。……／……この人が民間から信望を博したのは、単に農事の指導だけにとどめないで、農民のよき相談相手となった点にあった。開墾に資力のないものために、懸命に努力してその資をえさせ、生活指導にまで及ぼすことが、辰三郎の持前であった」（上掲書〔1970〕132、134頁）。

であった反面、剣術の達人であったという記録もあり、村に与えた感化は、短い年月にもかかわらず大きいものがあつたとされている（上掲書〔1970〕133～135頁）。

2006年発行の『新 大野町史』には、次のような記述が見られる。「経済的支援と併せて、勸農係として平野の農業指導に役割を果たした人的な支援も大きい。／江戸の人で奉行から任命された中島辰三郎、同じく辰三郎の後任として大野の農事指導を直接担当した相模の人・大友亀太郎、民間から起用されてその任にあたつた本郷の釜沢太右衛門らの功績を見逃すことはできない。」（上掲書〔2006〕122頁）

以上、『大野町史』、『新 大野町史』二冊の文献に見られる亀太郎関連の記述を中心に考察してきたが、これらの叙述は（道南地方最大の平野部で、旧上磯町・旧大野町・七飯町鶴野地区へと連なる）大野平野における農業開発に貢献した幕末から明治初期の人物に焦点を当ててなされている。実際に、後にこの大野平野は北海道における水田発祥の地（旧大野町^{むらうち}村内、現北斗市村内）となるのである。¹⁴

次に、七飯町における亀太郎の足跡を辿ってみよう。『七飯町史』（1976年刊）には、次のような記述が見られる。

日光表の篤農二宮金次郎に師事し、同〔安政〕5年2月8日、新妻助惣が蝦夷地御雇仰せ付けられて、箱館に向かったときに、借方として同行し、安政5年12月15日に、箱館在住の辞令を受け、士分帯刀を許され、飯倉の姓を大友と改め、開墾場農夫取立方を仰せ付けられている（上掲書〔1976〕234～235頁）。

……、特に、大友亀太郎の指導で掘った堀や、彼の寄附によって出来た妙見堂¹⁵は、今もその名残をとどめている。鶴野の開拓につくした新妻助惣や、大友亀太郎の功績は、草創の寺谷第吉に比肩して、決して劣るものではない。……／鶴野の古老は、今でも大友の功績を称え、敬慕している（上掲書〔1976〕236～237頁）。

かくの如く、木古内村、七飯村両村における開墾の手腕を認められ、蝦夷地開墾掛に任用された亀太郎は、慶應2年4月、石狩場所の調査を命ぜられて、石狩に赴任することとなる。石狩場所における亀太郎の農事指導者としての活躍と足跡とを、以下において、各種『札幌市史』を通じて確認することにしよう。

大友亀太郎に言及している『札幌市史』としては、次の3種類計6冊がある。すなわち、刊行年の古い順に、『札幌村史』（1950）、『札幌區史』（1973）、『新札幌市史』（1987、1989、

¹⁴ 現北斗市村内地区に建立されている「北海道水田発祥の地記念碑」については、拙著〔2024〕230頁参照。

¹⁵ 亀太郎の寄付により七飯町鶴野地区に建立された妙見堂及び馬頭観音碑、亀太郎が同地の開拓に寄与した鶴野地区の水田風景については、小野洋一郎編著〔1986〕62頁を参照。

1991, 1994) がそれである。歴史研究文献として、その編集並びに論述内容の観点から見て最も充実しているのが、最後に挙げた『新札幌市史』である。本書の「第6巻史料編1」には、大友亀太郎の生涯と『大友亀太郎文書』に関する「解題」も付されている。よって、この『新札幌市史』の叙述を中心に、亀太郎の足跡を辿ることとする。

慶應2(1866)年2月1日に在住¹⁶の関定吉ならびに大友亀太郎は、箱館奉行所より次のような申渡書を受けた。その内容を簡潔に記すと、ほぼ以下の如くである。

すなわち、蝦夷地の開拓に関しては、……捨てて顧みないという問題では決してありえないので、当面1カ年の予算金3000両を目途として、まずもってイシカリ場所に農民を入植させ、それから徐々に奥地へ向けて開拓を進めていく考えである。ついではこのイシカリ開拓の取り扱いを、関定吉と大友亀太郎に命じる(札幌市教育委員会編[1989]921頁)。

大友自身の『履歴書』(大友亀太郎文書補遺)によると、大友は慶應2年4月14日、いよいよ大野村を立出、同月23日にイシカリ役所に到着した。……同29日より御手作場の地所選定にとりかかったが、その折案内したのは当時シノロにおいて開墾に従事していた早山清太郎であったという(上掲書[1989]927~928頁)。

イシカリ御手作場の地所選定に基づき、そこに人間の手によって開墾地を切り開こうと意図していた大友には、当然それなりのプランが懷抱されていた。その内容は、木古内・大野両村において……の経過の中で学び、さらにさかのぼれば直接門をたたいて学ぼうとした、二宮尊徳の仕法に依拠していることは想像に難くない。……／……要するに大友の開拓方法とは、新道・用排水路を開削して人馬・物資の流通と耕耘可能な環境を造成し、しかる上に、特に当初において、風土になれない移住農民に対し、居宅、家財、農具、飯米等におよぶ充分な扶助を与え、もって自立・自営の農民を創出することにあったといえよう(上掲書[1989]928~929頁)。

……、結局、イシカリ御手作場への移住ないしは編入農家は、入植後1戸の離村もみることなく、慶應4(明治元)年の12月末をもって、総戸数23戸、95人(うち男53人・女42人)を数えるにいたった。なお23戸の出身地をみると、津軽7、南部7、越後4、秋田1、庄内1、在地3である(上掲書[1989]942頁)。

これらの農民ならびに大友・黒鉄の第次郎・木挽の安之助などの起こし分を含めて、慶應4年の開墾地積は畑23町2反4畝18歩であった。ここに慶應2年より4年に至る3カ年間のイシカリ御手作場の開発田畑は、田が4反4畝、畑が46町1反6畝23歩で、総起返し田畑地積は46町6反23歩をみたのである(上掲書[1989]948頁)。

¹⁶「在住」とは、「江戸にいる役職のない武士で、蝦夷地開拓を希望した人」のことをいう(札幌市東区市民部総務企画課編[2002]67頁)。安政5年12月15日、箱館奉行所より亀太郎も「在住」に任命されている(札幌市教育委員会編[1989]922~923参照)。こうした「在住」と称された人物を蝦夷地開拓の尖兵として幕府が配置し、その開拓に従事させる制度のことを「在住制」と呼んでいる(上掲書[1989]920頁参照)。

上述の如く、模範農場としての「石狩御手作場」の造成に亀太郎が精力的に取り組んでいた正にその最中に、亀太郎の思案の全く及ばぬ所で、亀太郎自身のその後の去就に大きな影響を及ぼす歴史的事件が起こるのである。すなわち、慶應3（1867）年10月14日、將軍徳川慶喜が大政奉還を上表し、同年12月9日に王政復古の大号令が発せられて、ここに江戸幕府は崩壊し明治維新政権が誕生したことが、それである。

かかる歴史的変革を契機として、亀太郎が蝦夷地開拓に賭けたその志半ばに北の大地から去らざるを得なくなった経緯¹⁷については、これまでの行論の過程において先述済みであるので、本件に関する叙述は省略したい。北海道を後にした亀太郎は、以下のような人生を送ることになる。

その後は、若森県（現在の茨城県の一部）、島根県、山梨県の官吏を歴任し、明治7（1874）年帰郷して副戸長、戸長に就任、明治14（1881）年には神奈川県会議員となって四期を務め、明治30（1897）年12月14日死去した。享年64歳、墓は小田原市西大友・盛泰寺にある（上掲書〔1989〕952頁）。

以上の叙述を以て、大友亀太郎に関する各種主要研究業績の概観と振り返りとを終えることとし、次章においては、大友亀太郎に関する今後の研究課題について考察を加え、そのことを通して大友亀太郎研究の展望としてどのような視界が開けてくるかを考えてみたい。

2 今後の研究課題

以上、大友亀太郎に関する先行研究をレビューしてきたが、ここで、先行研究によって達成されている研究業績と達成されていない研究課題とに焦点を絞って考察してみよう。

まず、先行研究によって達成され、かつ共有化されている研究業績としては、以下のものがある。

第一に、亀太郎の生い立ちから二宮尊徳の門下となる次第、その後の報徳仕法に基づく蝦夷地での開墾活動、北海道を去って以降の本州各県における農地造成指導者としての活躍、その後神奈川県議会議員として活躍するまでの、言わばその生涯に関する伝記的研究。

第二に、札幌市の東西の基点となる創成川の前身となる「大友堀」掘削の指揮監督を行ったこと。「大友堀」が実際に掘削された流路については、いくつか議論がある（札幌村歴史研究会編〔1982〕89～110頁）ものの、この用水路が現在の札幌の繁華街である薄野^{すすきの}の入り口手前に当たる南3条東1丁目から北6条東1丁目辺りまで開削されたものである、との共通認識がなされていること。

¹⁷ この件については、「幕府の倒壊と大友亀太郎の去就」という標題で書かれている『新札幌市史』第1巻通史1（1989年刊）の950～952頁の詳細な叙述を参照されたい。

第三に、大友亀太郎が蝦夷地開拓（道南地方の木古内・七飯・石狩地方の札幌・当別）に精力的に取り組み、時の幕府（＝箱館奉行所）よりその業績を認められながらも、明治維新変革の荒波¹⁸に飲み込まれ、志半ばに北海道を後にせざるを得なかった、その歴史的背景と経緯とについての認識。

次に、今後の大友亀太郎研究の課題としてはいかなる視点が考えられるかを考察してみたい。第一に、二宮尊徳から大友亀太郎への思想的系譜をより具体的に究明するという研究課題である。

この件について、小野洋一郎氏は、「人の一生は、金儲けにばかり熱中することではない。世を正し、人のためになる積善の道こそ、その目的でなければならない。」と、二十一歳にしてこんな思いが心を過った。それは、その後の亀太郎の生き方の信条ともなったものであった。勿論、そこには尊徳の報徳思想が強烈に影響していた。」（小野洋一郎編著〔1986〕29頁）、と記している。

とはいえ、亀太郎が尊徳の門弟として入門を許されたのは安政2（1855）年3月のことで、それは、今日の土方とも土木技術者とも云える破畑人足としてであった。田畑を耕し、堤防を築き、水路や道路を開削し、土地を開墾することが、仕事であった。亀太郎が尊徳の門弟として入門した当時、尊徳は70歳近い高齢の上に、病気がちで、直接尊徳に教えを乞うわけにはいかなかった。そんな亀太郎に、尊徳の高弟富田久助（高慶）が目をかけてくれた。そうして、尊徳は亀太郎が尊徳の門弟となってわずか約1年半後の安政3（1856）年10月20日に、69歳の生涯を閉じたのである（小野洋一郎編著〔1986〕30～34頁参照）。

師匠と弟子との思想上の系譜を考える時、二人の人間が直接交流できた期間の長短が必ずしその思想的影響の深浅を規定するものではないが、だからこそ、1年半という短い期間に亀太郎が師である尊徳から具体的にどのような思想を受容し得たか、を問うことは今後の研究課題の一つとして視野に入れておく必要があるだろう。

第二に、本論において何度か論及した点であるが、筆者としては、亀太郎が幕末から明治維新変革期の社会的動乱に巻き込まれ、北海道を去らざるを得なかった明治初期の北海道統治をめぐる薩長藩閥と土肥藩閥との権力闘争についてもう少し究明してみたい、という興味関心を捨てることができないでいる。

第三に、土木技術者としての亀太郎¹⁹に焦点を絞って、エンジニアとしての亀太郎の姿を浮

¹⁸ 大友亀太郎が二宮尊徳の門弟となる1855（安政2）年前後から北海道を去るに至る1870（明治3）年6月までの時代、国内外で次のような重大な政治・外交状況が続いた。

1853 米使ペリー浦賀来航

1858 安政の大獄、日米修好通商条約調印

1860 桜田門外の変

1868 明治維新 （以上、児玉幸多編〔2019〕24、26頁）

上記の詳細な時代把握については、『遠山茂樹著作集 第二巻 維新変革の諸相』が有益である。

¹⁹ この件について、北海道産業考古学会会長である山田大隆氏は、次のように述べている。「亀太郎は、図面を描く土木の主任技術者であった。彼は、数学が得意であったらしい。」筆者が、「今後の

き彫りにする，という研究課題である。亀太郎が，実際に使用したとされる測量器やソロバンが残されているからである（これらの品の一部は，札幌村郷土記念館2階に展示されている）。明治初期以降における北海道開拓史の歩みを考える時，橋梁，道路，用水路といったインフラの整備，建設はその後の北海道開拓にとって必須の事業であった。かかる視点からも，北海道における土木技術者のパイオニアとしての亀太郎に光を当てることには意義があると考ええる。

第四に，道南地方において大友亀太郎が果たした，開拓の実態についてのより詳細な解明をする余地が残っていると考える。というのは，亀太郎が開墾指揮を執った木古内村，七飯村については，いくつか疑問点があるからである。

『新 木古内町史』には，こうある。「安政五（一八五八）年に幕吏・大友亀太郎らが，箱館奉行所より「箱館在木古内村開墾場取扱」の役職を命ぜられ，越後地方から移民を募集して中野と瓜谷の開拓を開始，明治十八（一八八五）年及び十九年には旧庄内藩士族一〇五戸が集団移住し，農業開発の基礎が築かれた。」（上掲書〔2023〕32頁）

『町史』の後半部分の叙述に起因する説と考えられるが，実は，亀太郎は「中野」，「瓜谷」だけでなく，「鶴岡^{つるおか}」という地区の開拓にも関わった，とする小田切氏（脚注2）の言説がある。²⁰『町史』の上記の叙述の全文を読む限り，亀太郎が開墾に関わったのはあくまで木古内村の中野，瓜谷両地区だけであり，「鶴岡」地区の開拓をしたのは，旧庄内藩（現山形県）の藩士であった，というように理解できる。現に山形県には，「鶴岡」という所が存在するからである。

二つ目の疑問点は，木古内村の開墾後，亀太郎が開墾に従事したとされる大野村「鶴野」地区をめぐる疑問である。1の「大友亀太郎研究史の振り返り」の項で，様々な文献の分析・考察を行ってきたが，その中で，亀太郎が開墾を担ったとされる地域名について，ある文献では「鶴野」地区のみとなっており，他方では次のような叙述も見られる。すなわち，「大野村原野七曲地方（現七飯町鶴野）」（安井〔1981〕113頁），「大野原野の七曲地方（今の亀田郡七飯町），鶴野の開墾」（小野洋一郎編〔1986〕63頁），「亀太郎は大野平野の中心地帯である鶴野，七曲に……」（札幌村歴史研究会編〔1982〕36頁），といった具合に，亀太郎が関与した地域

亀太郎研究の視点としては，どのようなものがあると思いますか？」，と尋ねると，山田氏は，「亀太郎が土木エンジニアであったことと，現在の土木工学の視点から亀太郎を見た時，彼に対していかなる評価を下し得るか，という視点です。」，と回答して下さった（2025年4月16日，聞き取り調査 於 札幌市内のファストフード店）。

²⁰「亀太郎は，木古内村・鶴岡地区の開拓にも従事したのか」，という疑問を解くため，木古内町郷土資料館・学芸員である木元 豊氏にこの件について問い合わせしてみた。同氏によると，「現町内には今も「鶴岡」という地域があり，亀太郎が開墾した「中野」，「瓜谷」は鶴岡より山間部にある。つまり，鶴岡という地域は，中野，瓜谷よりは市街地に近い所にある。「鶴岡」地区を開拓したのは，旧庄内藩士であり，亀太郎はこの地区の開拓には関与していない。亀太郎が関与した中野，瓜谷地区の開墾は，当初は幕府の財政的補助もあり進展したが，徐々に補助が減少し，亀太郎によるこれら両地区の開墾が地元へ根付くことはなく，成功したとは言いがたい。」（2025年7月11日，電話調査。木元氏の実名表記については，本人の承諾済）。実際に，亀太郎が木古内村の開墾に従事したのは安政5（1858）年～同6（1859）年のことであり，このことから推測しても，木元氏の上の立言は首肯できる。

名である「鶴野」と「七曲」^{ななまがり}とが混在して表記されているのである。²¹

道南地方と縁のあった亀太郎の伝記的研究の素材として、亀太郎が七飯村在住時代結婚したとされるサダという女性についての追跡調査に基づく研究課題の設定である。この女性については、「元治元年（一八六四）四月二日、三十一歳の亀太郎は、大野村に近い有川村（今の亀田郡上磯町）〔現北斗市〕で廻船問屋を営む種田徳兵衛の三女サダと結婚した。サダの父親徳兵衛が、亀太郎の人物と行動にほれこんでのことであった。亀太郎とサダとは九つの年齢差があったが、夫婦仲は円満で、その後四男一女に恵まれた。」（小野洋一郎編〔986〕64～65頁）、との記述が見られる。これと合わせて、子供全ての名前と生年月日まで記されており、亀太郎の結婚に関する記述としては、上掲書のそれが最も詳細である。

亀太郎の妻・サダの出身である種田家は、その子孫が現在も北斗市に存命なのかどうか、ということを含めて、種田家のその後について追跡調査をしてみることも、興味深い研究課題となると考えている。

おわりに

本稿執筆の経緯については、脚注2で触れた様に、本稿は、言わば拙著〔2024〕出版に関わる執筆作業のスピンオフ作品として成ったものである。筆者としては、札幌市の中央部を流れる有名な創成川が存在を知っている人が多いとしても、その前身となる「大友堀」の掘削建造に力を尽くした大友亀太郎の名前を知っている人は少ないことに気付き、彼の功績に少しでも光を当てたい、との思いから本稿を草したしだいである。

札幌村郷土記念館を2025年2月13日、初めて訪問した際、館長^{はるひと}の山田治仁氏と同館事務局長の玉井晶子氏とから、大友亀太郎の事績に関して様々ご教示頂いた。その中で、2018年11月1日に、「大友亀太郎の事績と大友堀遺構」が北海道遺産として選定されたことをご教示頂いた。しかしながら、亀太郎をめぐるかかる顕彰が進みつつあるものの、大友亀太郎に関する各種事績資料を保管・展示する札幌村郷土記念館（1976年12月新築、77年4月12日開館）の知名度がなかなか上がらない（正木浩司〔2020〕28～30頁参照）、という課題を抱えているのが現状であるという。

²¹ この疑問を解消すべく、七飯町歴史館学芸員・山田^{ひまし} 央氏に問い合わせてみた。同氏は、次のように述べている。「昭和3（1928）年に、これらの地方の行政区域名が変更となり、「七曲」という地域名は地図上から消えた。従って、それ以前の地図上には「七曲」という地名があった。「七曲」という地域は「鶴野」の北側に隣接する地域で、当時大野村の区域内にあった。」（2025年6月25日、電話調査）。山田氏は、拙著〔2024〕第4章を執筆する際、聞き取り調査に応じて頂き、七飯町について種々ご教示頂いた方である。亀太郎が大野村（七飯村）に在住したのは、安政6（1859）年～慶應2（1866）年4月までの期間であり、幕末のしかも維新変革の歴史的動乱が胎動していた時代にあって、蝦夷地の行政制度も未整備な状態にあったことが、上述のような地域名混在に反映しているのかもしれない。また、当時、その地域の住民が口承的に呼称していた二つの地域名が、錯綜した状態で流布していた結果なのかもしれない。

このような大友亀太郎をめぐる研究史と現状とに鑑み、本稿が今後の大友亀太郎研究への新たな興味関心を喚起することに少しでも役だってくれたら幸甚である。

最後に、社会思想史研究の泰斗である水田洋氏の以下の至言を提示し、自身の今後の歴史研究の糧としてゆきたい。

では、歴史学は、どのようにして、現実の社会的実践に参加しうるか。歴史学の任務は、歴史の継承をあきらかにすることによって、歴史を継承する人間をつくりだすことである。いいかえれば、歴史研究は、歴史を継承し創造する人間（革命的人間）の形成を、目的とする。それは、過去の遺産を、そのまま現在にいかすことではなく、逆に、過去の人物と、無媒介に現在の立場で、対決することでもない。歴史じょうの人物（すくなくとも、問題とするにあたいする人物）は、そのとき、かれにあたえられた歴史的社会的諸条件と対決し、また、おなじ条件への人間の対決のしかたについて、同時代人たちと対決した。そのような対決の成果が、あたらしい歴史をかたちづくり、その歴史はさらに、つぎの世代が対決すべき歴史的社会的諸条件となる（水田洋〔1954〕415頁、漢字は新字体に改めた）。

〔参考文献〕

- Minoru Uchida [1989], *HISTORICAL GEOGRAPHICAL CONSIDERATIONS CONCERNING THE REGIONAL CITY OF SAPPORO — City Planning in the Meiji Period* —, 『札幌大学女子短期大学部紀要』第13号（通巻33号）札幌大学
- 朝尾直弘・宇野俊一・田中琢 [1997] 『最新版 角川新版 日本史辞典』角川学芸出版
- 足立英治 [1972] 『蝦夷の夜明けを告げた鐘 札幌・創成川の建設者・大友亀太郎の偉業と生涯』『日本及日本人』政教社、金尾文淵堂（国立国会図書館所蔵）
- 飯田吉次郎編 [1970] 『大野町史』大野町役場
- 伊藤瑞叡 [2012] 「札幌開拓三恩人と妙見山本龍寺」妙見山 本龍寺
- 井上三男 [2005] 「国土調査の先駆者 二宮尊徳」『測量』（月刊）
- 臼井勝美・高村直助・鳥海靖・由井正臣編 [2001] 『日本近現代人名辞典』吉川弘文館
- 『大友亀太郎文書』北海道大学附属図書館所蔵
- 『大友亀太郎之傳』北海道大学附属図書館所蔵
- 大野町史編さん委員会編 [2006] 『新 大野町史』北斗市
- 小野洋一郎編著 [1986] 『報徳の人 大友亀太郎』北辰堂
- 「開拓の群像」刊行委員会編 [2019] 『開拓の群像 北海道開拓に尽くした先人たちの軌跡』「開拓の群像」刊行委員会
- 木古内町史編さん委員会編 [2023] 『新 木古内町史』木古内町
- 桑原真人 [1982] 『近代北海道史研究序説』北海道大学図書刊行会
- 児玉幸多編 [2019] 『日本史年表・地図』吉川弘文館
- 阪本一之 [2004] 「札幌発展に大きく貢献した北海道最初の用水路・大友堀（現・創成川）——大友亀太郎——」『開発こうほう』第495号、（財）北海道開発協会
- 佐々井信太郎 [1927] 『二宮尊徳研究』岩波書店
- 札幌区役所編 [1973] 『札幌區史』株式会社 名著出版

- 札幌市教育委員会編 [1987]『新 札幌市史 第六巻 史料編一』札幌市
- 札幌市教育委員会編 [1989]『新 札幌市史 第一巻通史一』札幌市
- 札幌市教育委員会編 [1991]『新 札幌市史 第二巻通史二』北海道新聞社
- 札幌市教育委員会編 [1994]『新 札幌市史 第三巻通史三』北海道新聞社
- 札幌市立元町北小学校編 [1977]『郷土誌 元町北—大友亀太郎をおって』札幌市立元町北小学校
- 札幌市東区市民部総務企画課編 [2002]『ひがしく再発見 まちの歴史講座① 東区の原風景』札幌市東区役所
- 札幌市東区市民部総務企画課編 [2003]『ひがしく再発見 まちの歴史講座② 札幌村の成立』札幌市東区役所
- 札幌村歴史研究会編 [1982]『東区今昔「大友堀」』札幌市東区役所総務部総務課
- 遠山茂樹 [1992]『遠山茂樹著作集 第二巻 維新変革の諸相』岩波書店
- 久田徳二「本と旅する 諸藩の再建 尊徳が導く」2017年5月28日「北海道新聞」
- 久田徳二「本と旅する 「大友堀」街づくりの礎」2017年10月29日「北海道新聞」
- 北海道新聞社編 [1981]『北海道大百科事典 上巻』北海道新聞社
- 北海道七飯町編 [1976]『七飯町史』北海道七飯町
- 北海道七飯町編 [2001]『七飯町史 続刊』北海道七飯町
- 本田辰雄編 [1950]『札幌村史』札幌村史編纂委員会
- 正木浩司 [2020]「大友亀太郎の事績と札幌村の生活史を伝える—「札幌村郷土記念館」を訪ねて」『北海道自治研究』第616号、公益財団法人 北海道地方自治研究所
- 松浦努 [2023]「北海道・蘭越町における馬喰（家畜商）の活動実態に関する流通経済学的考察」『経済論集』第70巻第4号（北海学園大学）北海学園大学経済学会
- 松浦努 [2024]『馬喰の流通経済学的研究 北海道蘭越町・八雲町・森町・七飯町の事例を中心として』北海学園大学出版会
- 水田洋 [1954]『近代人の形成—近代社会観成立史』東京大学出版会
- 三田村昭吾 [2016]「「二宮尊徳」・「大友亀太郎」に見る「報徳」の考えと行動—札幌・創成との関連—」について『北海道の文化』第88号、北海道文化財保護協会
- 守田志郎 [1989]『二宮尊徳』朝日選書
- 安井敏彦 [1981]「大友亀太郎の研究とその教材化」『史流』北海道教育大学史学会